

虚構の時

斎藤拓也 父親の病気を知り、父親のある告白をきっかけに、自分のルーツを調べ始める。

二十八才。

木元弘美 拓也の恋人。拓也の調査を手伝う。看護師で明るい性格だが、元々孤児だった。

二十三才。

斎藤隆 拓也の父。余命わずかにして、拓也にある告白をする。六十七才。

小野美咲 「サキ」と呼ばれるキャバレー「ミラーージュ」のダンサー。隆の元恋人。

間宮澄子 「ジュン」と呼ばれる美咲の仕事仲間。

中島清太郎 「ミラーージュ」の常連客。隆の大学の先輩。

小林登 中島の同級生。「ミラーージュ」へも顔を出す。

斎藤歩 拓也の妹

斎藤治 隆の父。中学校教師。

斎藤智子 隆の妻

上田 カメラマン。拓也の仕事上の上司。

真実 モデル。

美紀 モデル。

アンサンブル モデル・ダンサー・看護師・町の人（一〜二名程）

M O 「オーバーチュア」

中途半端な曲終わりで、センターサス。
車椅子に乗った六十代位の男性がいる。(斎藤隆)

隆

今までずっと嘘をついてきた。自分にも周りにも。

過ぎゆく時は残酷で幸福で、「真実」なんて本当はどうでもいいんじゃないかって、最近思うようになった。年を重ねると嘘をつく事に無駄を感じる。かといって事実をありのまま話すのも、あまりに幼いじゃないか。

例え私が事実を言っても、そこには私の主観が入るし、他人が言ってもそれは同じ。人を想い嘘をつく事と、人を想い真実を話す事では両者にどれほどの違いがあるというんだ？

嘘をついていた事は告白する。だが、これ以上お前には何も言わない。何も言わないよ……。

暗転

転換

現代。

撮影スタジオの中。セットにソファを用意。

M1 「BGM①」

音楽が流れる中、数人の女性が写真撮影をしている。
多少ダンス的なモノがあってもいい。

カメラマン（上田）の声女性の笑い声など、華やかな雰囲気。

その中で、レフ板を持って動き回る斎藤拓也。

※会話の間も撮影は続行。

上田

美紀ちゃん、目線頂戴。いいねえ。真実ちゃん、ウエスト捻ってみて、
そうそうそんな感じ・・・（等々、アドリブよろしく。女性もアドリブで
返す）。・・・おい、斎藤！何処当ててんだ！陰出てんだろ！

斎藤拓也

はい！すみません。

上田

そんなんだから、いつまでたっても半人前なんだよ。ねえ、美紀ちゃん。

美紀

斎藤さん、幾つなんですか？

上田　こいつ？もう二十八。三十手前で未だにアシ。

美紀　え、そうなんですか？

上田　才能ねえんだよ、なあ斎藤。

拓也　すみません。

上田　ちえ、なんかさあ、本当にお前、やる気あんのかないのか分かんねえんだよ。俺にはさあ。

真実　でも、分かんないわよ。よく言うじゃない？大器バンサンとか何とかって。ほら、年取ってっから売れる人。

美紀　タイキバンサン？美紀、難しい言葉分かんない。

上田　ん、真実ちゃん、ちよつと違うかも。

真実　え、違う？だって有名な「最後の晩餐」って、そういう人の絵なんですよ？

上田　そういう人って？

真実　え、つと、ミケランジェロ！

（独り言のように）　ダ・ヴィンチだけど……。大器晩成でもないし……。

美紀　凄く、真実って超頭いい！

真実　私、こう見えて小学校の時、美術の先生好きだったんだ。

上田　（独り言）　関係あるのか……？

美紀　真実、その先生と、もしかして……やっちゃったとか？

上田　（独り言）　小学生だぞ。

真実

え〜。：：言えない。

上田

(独り言) 否定しないの？

美紀

いいなあ、いいなあ。美紀も先生好きになればよかったなあ。そうすれば、こんなおバカなキャラじゃなくて、クイズ番組とか出れたのに。

真実

プロデューサーから声掛かんなきや無理よ。結局は、事務所の力なのよねえ。私みたいに頭良かったって、クイズ番組なんか呼んでくれないもん。

上田

：：ハハハ。さあ、皆さん仕事しましょうね。どんなにバカでも、グラビアは関係ありませんよ。

美紀

あくやっぱりバカにしてる上田さん。ま、しょうがないか。ハハハ。美紀と一緒にしないでよ。私は違うもん。

上田

同じだよ。さ、真実ちゃんこっち見て。美紀ちゃんも。二人もつと寄つて、そうそう：：。斎藤、何ポケットとしてんだ！ちゃんと当てろって言つてんだろ！

拓也

はい！

一、二枚撮り終えた所で

上田

はい、お疲れ〜。

女の子達

お疲れ様でした〜。

スタッフ・女の子等が「お疲れ」と言いながら退場
斎藤も帰り支度をしている。

上田 斎藤、これ加工な。明日朝一までにやっつけ。

拓也 朝一、ですか？

上田 そう。何か問題あるか？

拓也 いえ、その：。

真実・美紀 上田さくん。早く。

上田 はいよ。んじゃ、お疲れ。

上田達が、ワイワイ言いながら退場する。

残された斎藤は帰り支度を締め、PCに向かう。

そこへ、拓也の恋人弘美が顔を出す。

弘美 こんにちは。あれ、拓也一人？

拓也 (PCを見たまま) 見りゃわかるだろ？病院終わったのか？

弘美 じゃなきや来ない。

拓也 まあ、そうだよな。

弘美 夜勤から日勤までやった。よく働いた私。早く帰ってお風呂入って、Hして寝たい。

拓也 先、帰ってろよ。オレまだだから。多分帰れない。

弘美 ……機嫌斜め？

拓也 ……。

弘美 みたいだね。何してんの？

拓也 バカな女達のシミや黒子を消してんの。

弘美 パソコンで？便利な時代。

拓也 全くだ。

弘美 ついでにバカも消しちゃったら？

拓也 ……フツ。どうやって？

弘美 簡単。何なら、やってあげようか？

拓也 おいおい、止めるよ。お前、写真消去するつもりだろう？

弘美 ピンポイント正解！（揉み合いになる）

拓也 止める。止めるよ弘美！

弘美 ハハハ。さあ、マウス貸しなさい！

拓也 こら！弘美！

拓也が弘美を抱えあげ撮影で使っていたソファに二人ともなだれ込む。二人笑いあい、暫くして。

弘美

（軽くキスをして）ねえ、拓也。辞めちゃったら？この仕事。…私、拓

拓也

弘美

拓也

弘美

拓也

弘美

拓也

弘美

拓也

弘美

拓也

弘美

也が好きでこの仕事してるって、思えないんだよね。

そう見える？

間違ってたらゴメン。

いや、間違っていないよ。

やっぱり。じゃあ何で、この仕事してるの？

珍しいな。オレの仕事の事なんて、今まであまり聞かなかったじゃないか。そう？別に興味が無かったわけじゃないわ。拓也は好きな仕事をしてるって思ってたから、特に聞く必要もなかったし。でも、最近違うんじゃないかなあって思ってたさ。

どうして？

「どうして」って……拓也のは、好きとかって言うんじゃないって、意地みたいはこの仕事に拘ってるから。でも、カメラマンにどうしてもなりたいとか、そんなんじゃないって……違う理由があるんじゃないかなあって。芸術をやるには、動機が不純だったのかもな。

どういう事？

何でも良かったのさ。「平凡」じゃなけりやな。タレントだろうが歌手だろうがカメラマンだろうが「平凡」って言葉とはかけ離れた人生を送りたかってそう思って、一番出来そうなものを選んでからカメラマンだったってわけだ。まあ、そのカメラマンにもなれてないけど。

「平凡」が嫌い？

拓也

うん。：いや、そうじゃない。嫌いなのは親父だ。「平凡」な親父。平凡って言うより、単調で変化のない生活をする親父かな。

弘美

そういえば、拓也から家族の話ってあまり聞いた事が無いね。でもそれは両親がいない私を思ってる事なんだと思ってた。(少しおどけて)さては、それほど優しい男ではないな？

拓也

(笑って)見くびるなよ。オレだってそれくらいのデリカシーはあります。でも確かに、自分の親を、親父を尊敬はしてないな。あの人は、オレの目を見ないんだよ。小さい頃からずっと。理由は分かんないけど。オレは親父に愛されてないって子供ながらに思った。：ごめん、弘美には贅沢な悩みだって言われそうだな。

弘美

いいよ、分かってる。だから今まで言わなかったんでしょ？

拓也

：。

弘美

(笑って)カッコつけちゃって。：ねえ、お母さんは、小さい頃に亡くなったって言ってたよね。

拓也

オレが一〇才の時事故でね。親父とは正反対で、母親は何故かオレを溺愛してたなあ。そんな母親が死んだ後は婆ちゃんがオレと妹の面倒を見てくれてね、その婆ちゃんも三年前死んじゃったけど、よくオレ達を育ててくれたと思うよ。親父は子育てには無関心だったからな。婆ちゃんには感謝してる。

弘美

そうだったんだ。で、そのお父さんの変化のない生活って？仕事は？

拓也

公務員。生活課だか何だか知らないけど、ずっと机に向かつてる仕事で、決まった時間に起きて決まった時間に帰ってくる。休みの日は家でテレビをずっと見てた。母親が死んでも同じ。新しい女を連れてくるわけでもなく、かといつて俺達を母親の分まで愛情を注ぐわけでもなく。以前と全く変わんねえ。五年前も一〇年前も全く変わらない生活をする。それが親父だ。別に変わらない事が悪いってわけじゃないんだけど、ね。

弘美

お父さんは、愛情表現が出来ない人なんじゃないの？感情が表に出ない人っているじゃない。

拓也

どうかな。昔、オレが小学生の時に、家族旅行なんて殆どしない親父だったから「何でうちは、旅行に行かないの？」って親父に聞いた事があってさあ。

弘美

そしたら？

拓也

「中学になれば修学旅行がある。」って言われたよ。だからわざわざ家族で行く必要がないってね。まだ、旅行に行くお金が無いとか言われた方が良かったよ。親父にとつての家族はそんなもんさ。

弘美

それで拓也は「父親のようにはなりたくない」って思ったのね。

拓也

(頷いて)生活が平凡で単調だと、感情まで無くしちゃまいそうで…。親父のように人の目を見ない、子供すら抱き締められない、そんな大人にはなりたくなかった。だから、カメラマンなんて大勢の人間と関わるような職業を選んでみたけど、オレも人付き合いは苦手らしい。結局、オレも大

弘美

拓也

弘美

した大人にはなっていないんじゃない？
待って。その先は、今は止めとこう。自分がどんな大人になったのかなんて、まだ分らないわ。これからよ。ね？
弘美……。お前、いい女だな。
知ってる。

二人笑いあう。

携帯の音（拓也）

拓也

弘美

拓也

おお、歩。どうした？（弘美に）妹。
まあ、凄いタイミング。早速家族からの電話ですか。
ハハ。え？何？もう一度言って。……え？親父？……いつ？……どうして？……うん……うん。……いや、これから行く。車で飛ばせば二時間位で着くよ。……分かった。

……どうしたの？

親父が倒れた。

え？

弘美

拓也

弘美

暗転

SE 「病院内の音（アナウンスなど）」

病院の一室。

拓也の父・隆がベットに横たわっている。

隆の傍らに、拓也の妹・歩が付き添っている。

歩

：・そんな事言っただってしょうがないじゃない。お兄ちゃんに知らせないわけにいかないでしょ？

隆

全く、余計な事を。

歩

少しは私の事も考えてよ。私一人じゃ不安にもなるじゃない。

隆

ここは、完全看護だ。支払いだって保険会社に任せてある。

歩

そうゆう問題じゃないわよ。どうしてお父さんって、いつもそうなの？。

隆

拓也が来たら、一緒に帰れ。なるようにしかならん。

歩

お父さん！

拓也と弘美が入ってくる。

拓也

歩。

歩

お兄ちゃん。弘美さんも、来てくれたんですね。

弘美

ごめんね、私まで付いて来ちゃって。

歩 いえ、心強いです。ありがとうございます。

拓也 親父。

拓也、弘美さんにはすまないが、歩も連れて帰ってくれ。大勢いてもどうにもならんからな。それに、そう簡単には死ねないそうだ。まだ一カ月はかかる。

歩 お父さん！なんて事言うの。

拓也 歩から聞いた。癌だなんて、オレそんな事これっぽっちも聞いてねえよ。何で今まで黙ってたんだよ！

隆 落ち着け。言った所でどうなる？治るわけでもないのに。

拓也 そうゆうもんじゃねえだろ？

歩 そうよ。家族でしょ？私達。

隆 家族……か。

看護師が入ってくる。

看護師 斎藤さん。(家族に)どうも失礼しますね。血圧と体温測らせて下さい。(測

りながら) 斎藤さん、良かったですねえ。お子さんが来て下さって。

隆 (構わず) 看護師さん。例のホスピスの件、どうなってます？

歩 ホスピス？何それ？

隆 お前達に迷惑はかけないつもりだ。オレの世話をする必要はない。

歩

ちよつと待って。世話をするとかしないとかの話じゃなくて。何でそういう事相談してくれないの？

隆

相談した所で、結論は変わらない。

歩

：・いつもそう。そうやって自分で全部決めちゃって。もういい。どこにでも好きな所にいけばいいわ！（部屋を出て行く）

拓也

歩！（追いかけてようとする）

弘美

（拓也を止めて）私行くから、ここにいて。（追いかけて退室）

拓也

すまん。

看護師

（隆から体温計をもらい、血圧計をしまいながら）：・えっと、斎藤さん。ホスピスの件は、ご家族ともう一度よく話し合って決めて下さい。こちらは何時でも構いませんので。では失礼します。（退室）

間

拓也

：・親父。

隆

ん？

拓也

変わらないな。

隆

ん。

拓也

何でそうなんだ？あんたにとっちゃ、家族なんてそんなもんか？

隆

：・。

拓也
隆
拓也
拓也

俺達が嫌いか？これっぽっちの愛情も感じないのか？
……。
そもそも、人を好きになった事なんてねえんだろ？
……。フツ、そう見えるんだな。
そう見えるよ。

上着を着ようとする隆。拓也が手伝う。
場面変わり、弘美と歩のシーンが入る。(エリア分け)

弘美
歩
弘美
歩
弘美
歩

歩ちゃん、大丈夫？
すみません、ちょっと気が動転してて。
仕方ないわ。誰だってそうなるわよ。
私、未だにお父さんの事良く分かんない。何も言ってくれないし。
病気の事、歩ちゃんは知ってたの？

(頭を振って)前に具合悪くなった時、私には胃潰瘍だって言ってた。さつき先生に聞いたたら、家族には言わないでくれてお父さんが口止めしてたみたいで……。今回は流石に先生も話してくれたけど。それも本当は嫌だったみたい。

弘美
歩

(根拠なく)きつと、心配掛けたくなかったのよ。
違う。そんなじゃない。お父さんは、私もお兄ちゃんも家族とは思って

弘美

ないのよ。
歩ちゃん……。

隆

面倒はかけたくなかったんだがな。

拓也

仕方ねえだろ、病気なんだから。それより横になってなくていいのか？

隆

今更、安静にする意味があるか？

拓也

また、そんな……。医者に見捨てられるぞ。

隆

心配すんな。疲れたら横になる。……まあ、とっくに医者には見捨てられてると思いがな。

拓也

どういう事だ？

隆

さつき、点滴を外させた。

拓也

は？……全く。でも大丈夫なのか？

隆

良くはないだろう。しかし、どうにもあの束縛された感じが嫌でな。医者は反対したが……。

拓也

そりゃ、そうだろう。

隆

「点滴が無くて困るのは私じゃなくてあなただ」って医者に言ったよ。医療行為をする事が医者義務かもしれないが、最後をどう過ごすかは、医者が決める事じゃない。私の勝手だ。

拓也

知ってるか？そうゆうのを身勝手って言うんだぜ。

弘美

家族って難しいのね。

歩

：弘美さん。弘美さんのご両親は、確かもう……。

弘美

死んだって事になってるけど……本当は捨てられたの。育児放棄って奴。

歩

そんな……。すみません知らなくて。

弘美

(少し笑って) 何、謝ってんの、私は大丈夫よ。拓也も知ってるけど、多

歩

分私を想って黙ってくれてたのね。物心つく前に施設に引き取られたから、

弘美

詳しくは知らないけど、虐待されなかっただけマシかも。

歩

辛かったでしょうね。

弘美

それでもなかったわ。施設の他の子達とも仲が良かったし、周りの大人は

弘美

みんな良い人で、特に大好きなおばさんは、私を自分の子供のように育て

歩

てくれてね。

弘美

良い施設だったんですね。

弘美

ええ。でも、本当に血の繋がった親子って、私が想像する以上に複雑なの

弘美

かもしれないわね。もしかしたら、他人だからこそ素直に愛情が表現出来

歩

るのかもしれないわ。

弘美

弘美さん……。そうかもしれません。

弘美

ねえ、コーヒーでも飲まない？少し休みましょう。(退場)

隆

なあ、拓也。弘美さんを好きなのか？

拓也

え？何だよいきなり。

隆

どうなんだ？

拓也

多分、好きなんじゃないか。

隆

他人事みたいだな。お前は、私と似てる。

拓也

一緒にするなよ。オレはあんたみたいな人間じゃねえ。

隆

そうか。：・拓也、実は、お前に話していない事がある。

拓也

あ？また唐突だな。何だよ、隠し子でもいるのか？だとしたら、尊敬する

けどな。

隆

(少し笑って) そうじゃない。でも、今までずっと嘘をついてきた。自分

にも周りにも。

拓也

嘘？

M 2 「BGM②」

隆

だけどなあ、過ぎゆく時は残酷で幸福で、「真実」なんて本当はどうでもいいんじゃないかって、最近思うようになった。年を重ねると嘘をつく事に無駄を感じる。かといって事実をありのまま話すのも、あまりに幼いじゃないか。

拓也

それは受け取り方の問題じゃねえか？事実をどう解釈するかは、個人の自由だろ。

隆

そうかもしれん。でもな、例え私が事実を言っても、そこには私の主観が

拓也

隆

拓也

入るし、他人が言ってもそれは同じ。人を想い嘘をつく事と、人を想い真実を話す事では両者にどれほどの違いがあるというんだ？

：：で？何が言いたいんだ？

：：何も。嘘をついていた事は告白する。(アルバムを取り出して拓也に渡す) お前に預けておく：：だが、これ以上お前には何も言わない。何も言わないよ：：。(眠る)

親父：：。

暗転

#4 「隆とサキ（美咲）との出会い（過去）」

1960年代。どこかのキャバレー。「ミラージュ」ダンスシーンは素舞台で。曲終わりの方でセットチェンジ。客席テーブルなどを設置。

M3 「BGM③」 ショーダンス

何人かのショーダンサーが踊る

その中にサキ（美咲）とジュンもいる。

曲の終わり、何人かの客が入ってくる（ショーを見ていた設定で）その中に中島・小林もいる。（したたか飲んでる様子）

以下、お酒を飲みながらの会話。

M4 「BGM④」（時代を感じさせるものがない） 会話の裏で薄く

中島

ジュンちゃん、最高！サキちゃんも相変わらずダンス上手いねえ。

ジュン

やだ、飲んできたの？いらっしやい中島さん。小林さんも、いつもありがとうね。

小林

それ皮肉？僕みたいな一般市民じゃ、こんな所、そう頻繁に来れないんだから。

ジュン

ウソウソ、全くどこで浮気してんだか。ねえサキ。

中島

僕はジュンちゃん一筋だよ。

ジュン

はいはい、知ってます。

サキ

(少し笑って) 小林さんモテるから。

小林

ちよっと待ってよ、サキちゃんこそモテモテでしょ。この店のナンバー1だって聞いたよ。僕なんか鼻にもかけてくれないんじゃないの？

サキ

ナンバー1だなんて、ありえませんよ。私、おしゃべり下手ですから。

中島

そこが、良かったりするんだよな。やたらお喋りな女じゃあ色気ないしなあ。

ジュン

ちよっと、それ誰の事よ。

中島

いいの、ジュンちゃんはそのままで。色気が無くてもオレがいるから。

ジュン

何よそれ！何のフォローもしてないじゃない！

中島

ごめんなさい。ウソウソ。許してジュンちゃん。

ジュン

調子に乗るんじゃないわよ。

ひとしきり皆の笑いがあった

小林

しかし、遅いなアイツ。

サキ どなたかいらっしゃるんですか？

小林 大学の後輩でさ。今年卒業して社会人になったんだけどね。今日はそいつの就職祝いも兼ねて飲みに来たってわけ。

サキ そうなんですか。それで、お仕事は何に決まったんですか？

小林 公務員。区役所勤めだって。堅いだろ？

ジュン あら、いいじゃない。親方日の丸。景気に左右されない安定した職業なんて最高よ。

中島 あいつの性格じゃあ、こんな所誰かが連れてこねえと、一生縁がねえと思っつき。優しい先輩が連れてきたってわけだ。

ジュン 優しい先輩ねえ。で？どこいっちゃったの？その子？

中島 タバコ買いに行かしてる。

ジュン 結局パシリさせてんじゃない。どこが優しい先輩よ。

隆がタバコを持って入ってくる
以後、中島・ジュン・小林は箇所箇所、無言芝居。

隆 遅くなりました。

中島 遅いよ。オレが怒られちゃったじゃないか。

隆 すみません。(タバコを差し出す)

ジュン (中島を小突いて)ちよっと。いらっしゃい、えっと水割りでいいかしら？

隆 いえ、お水で……。

中島 こいつ、お酒弱くてさあ。

ジュン まあ、そうなの。健康的ね。

隆 すみません。

ジュン あら、いいのよ。どうぞ。

隆 ありがとうございます。(水を飲む)

サキ ご苦労様です。タバコ屋さん遠いから大変だったでしょ？

隆 いえ。あの……ダンスは終わっちゃったんですか？

小林 ついさっきな。何だ？斎藤、お前ダンスなんかに興味あったのか？

隆 え、ええ、まあ。詳しくはないんですけど。あ、勿論、自分は全く踊れませんが。

小林 そりゃそうだろうよ。ダンスなんて、お前そんな性格してねえだろ？

隆 そうですよね。

サキ 「斎藤さん」っておっしゃるの？

隆 はい、斎藤隆っていいいます。こういう所初めてで。何だか自分、場違いですみません。

サキ それじゃあ、私と一緒にね。

隆 え？

サキ 私もね、踊るのは好きだけど、飲んで騒ぐのは苦手なの。

隆 そうなんですか。大変ですね。

サキ ……（微笑）。

隆 何か？

サキ 普通、こういう話をするの大抵の人は「じゃあ何でここにいるの？」なんて聞いてくるけど、斎藤さんは何も聞かないんですね。

隆 あ、すみません。女の人と話をするのが、あまり慣れてなくて……。

サキ ううん、いいの。だって初対面ですもの。私はそれが普通だって思うわ。

隆 そう言ってもらえると……。

サキ じゃあ、私から、いい？

隆 はい。何でしょう？

サキ 就職決まったってお聞きして。公務員ですってね。区役所か何か？

隆 はい、区役所の生活課です。面白くない仕事ですよわ。

サキ そんな事……。でも、何で？

隆 親父が教員で、お前も公務員になれって。

中島 親に逆らえない軟弱者なんだよそいつ。

ジュン ちよっと、人の話に割り込まないの。ごめんなさいね。

隆 いえ、その通りですから。

小林 こいつの親父ねえ、中学校の先生なんだけど、まあ頑固親父を絵にかいたような奴でさあ。

ジュン 知ってるの？

小林 知ってるも何も、中学の時、俺たちの担任がこいつの親父だったんだから。

ジュン

まあ、そうだったの。

中島

「竹刀の斎藤」って言われてさあ、授業中ずっと、竹刀持ってんだぜ。
(小林に) そう言えばお前、よく殴られてたよな。

小林

部活が野球だったから朝早くてさあ、朝飯食わないで練習やってたから、よく早弁してたんだよ。それ、見つかつちゃって。

中島

そうそう、それでこいつ弁当取り上げられるわ。竹刀で殴られるわ。ハハハ。

小林

笑い事じゃねえよ。昼飯はいつも職員室で食わせられてさあ。その間ずっと説教聞かせられる身にもなってみるよ。

ジュン

怖い先生だったのね。家でもそうなの？

隆

家では、あまり話さないから。

中島

うちの親父は飲んだくれだったから、どうしようもない奴だけど、隆の親父よりはましだわ。オレんちはお袋の方が怖かった。

小林

だから、気の強い女には弱いんだよなあ、お前は。マザコンなんじゃねえの？

ジュン

え？ そうなの？

中島

そうなのよ。ママ〜！ (ジュンに抱きつこうとする)

ジュン

こんな子、産んだ覚えはありません！

(笑いの中で)

隆
サキ

あの、聞いてもいいですか？
どうぞ。

隆
サキ

踊ってる時、楽しいですか？

ええ、勿論。私ね、いつか大きな舞台で踊るのが夢なの。でもそうじゃなくとも、小さな舞台でも、踊ってる時が一番生きてるって実感するの。だからとつても楽しいわ。

隆
サキ

練習は、辛くないんですか？

そうね、辛い時もある。でも、舞台に立った瞬間にそんな事忘れちゃうの。：ねえ斎藤さん、本当はダンス踊れるんじゃないの？

隆
サキ

え？いえ、踊れるってほどでは。さつき、全く踊れないって言ったのは嘘ね。でもダンスホールとかに、何回か行ったぐらいですから。

隆
サキ

やっぱり。斎藤さん、ダンス好きでしょう？

隆
サキ

多分、好きだと思います。他人事みたいに言うのね。「多分」じゃなくて「とつても」好きなんじゃないの？

隆
サキ

何だか照れ臭くて：：その「好き」って言葉が。大事にしてる言葉って照れ臭いわよね。「好き」とか「愛してる」とか。

隆
サキ

：：そうですね。

サキ

それで、ダンスのどんな所がいいの？

隆

踊るより見る方が好きなんです。言葉じゃなくて体で表現できるって凄いなって。嬉しさや楽しさが伝わってこっちも幸せになれる。だから、そんな事が出来る人って素晴らしいと思います。勿論あなたも……えっと。

サキ

サキよ。嬉しいわ。今まで言われた褒め言葉の中でも、最高の褒め言葉よ。そんな……。でも、今日は見れなくて残念です。今度は必ず。

隆

うわあ、緊張しちゃう。その時までにもっと上手くななきゃ。頑張ってるッスンしておくわね。

サキ

隆

(微笑して)期待してます。

中島

おっ、さっきっから二人の世界作っちゃんでんじやないの？何だか怪しいなあ。

小林

まあ、オレを差し置いてサキちゃんと仲良くなってくれちゃって。

ジュン

もう、いいじゃない二人とも。今日は斎藤さんの就職祝いなんでしょ？改めて皆で乾杯しましょうよ。

中島

そうだな、今日は仕方ない。よし、じゃあ皆いいか？斎藤隆のこれからの輝かしい未来を祈って乾杯！

全員

乾杯！

ジュン
中島
サキ

あ、この曲良いわね。みんなで踊りましょうよ。
よし！
行きましょう。

踊りの中にサキと隆も混じる。
次第に舞台溶暗
転換

前芝居。(弘美と拓也(上手・下手))

拓也が一枚の写真を片手に入ってくる。

逆サイドに弘美。

後ろ転換。喫茶店に。

SE 「携帯の音」

拓也

もしもし。

弘美

もしもし拓也? ごめんね。あんまり一緒にいてあげられなくて。

拓也

大丈夫だよ。そんなに病院も休めないもんな。親父も、まだ直ぐどうこう
ってわけじゃないから。今は状態も安定してる。時間の問題だけど。

弘美

そう……。それで、写真が見つかったんだって?

拓也

ああ、親父のアルバムから出てきた。何故かこの写真の上にもう一枚違う
写真が重ねてあって、一見分からないようにしてあったんだ。

弘美

それがサキさんって人の写真?

拓也

ああ。この写真のバックに写ってるお店はキャバレーらしいんだけど、そ
のお店はさすがに無くなって。色々聞いて周ったら、偶然近くのスナッ
クのママさんが、当時のキャバレーの元ダンサーだったんだ。で、そのマ

マさん、サキさんとは面識はあったみたいだけど、あまり詳しくはないからって、サキさんと仲が良かったジュンさんって人を紹介してくれてね。そろそろ来ると思うけど。

弘美

でも、びつくりしたわ。拓也、急に仕事辞めちゃうなんて。

拓也

突然、相談もなしにゴメンな。暫く実家で親父の事、調べてみたくてさ。ううん。いいのよ。逆にいい機会だと思ったわ。拓也には。

拓也

そうかもな。

弘美

ねえ、拓也。大丈夫？

拓也

ああ、親父の事なら、何かあったら連絡するから。

弘美

そうじゃなくて、あなたよ。

拓也

仕事の事なら心配しなくても……。

弘美

違うわ。そういう事じゃなくて……。

拓也

何？

弘美

その、つまり、お父さん、浮気っていうか、お母さん以外の人を好きだっ

拓也

たかもしれないんでしょ？

弘美

複雑じゃないの？その気分的に、息子として。

拓也

(苦笑して) まあ、そうだよな。普通なら。

弘美

普通ならって……拓也は何とも思わないの？

拓也

何て言うのかな……親父にそんな感情があった事が意外っていうか、むしろ

弘美

弘美
拓也

ろ嬉しいって言うかさ。
嬉しい？

うん：。でもまあ、サキさんとの事は結婚前の事で、たいした話じゃな
いかもしれないしさ。とにかく、そのジュンって人に会って詳しく聞いて
みるよ。

弘美

そうね。：。ねえ拓也、こんな時に言うのもなんだけど、何だか楽しそう
ね。

拓也
弘美

そっか？（苦笑して）あ、そろそろ切るわ。また連絡する。
分かった。またね。（退場）

喫茶店。

M 6 「BGM⑥」（喫茶店BGM）

携帯を切り、喫茶店の椅子に腰かける拓也。

暫くキョロキョロしていると、老婆（ジュン）が来る。

年はとっているが小奇麗にしている感じで腰もあまり曲
がってはいない。

拓也

あの：。。

ジュン

斎藤さん？ですね。

拓也

はい、斎藤拓也と申します。わざわざお越し頂いてすみません。

ジュン

拓也さん……。お父様そっくりね。お父様も謝ってばかりいたわ。

拓也

(微笑して) どうぞ、お座り下さい。(椅子を引く)

ジュン

ありがとうございます。(座る)

拓也

(店員を呼ぶ) すみません。(ジュンに) あの、飲み物何にしますか？

ジュン

コーヒー。ブラックで。

拓也

……

ジュン

(微笑して) 昼からウイスキーってわけにはいかないでしょ。

拓也

(微笑で返してから店員に) コーヒー2つ。ブラックで。

店員

かしこまりました。(去る)

ジュン

拓也さん、お酒は飲むの？

拓也

僕はダメですね。すぐ酔っ払ってしまっつて。

ジュン

隆君もそうだったわ。あ、ごめんなさい。お父様を「隆君」だなんて……

拓也

いいえ、いいんです。ジュンさんはお強いんですか？お酒。

ジュン

そうですね。皆にザルだって言われてたわ。ジュンさんか……

拓也

何か？

ジュン

本名は違うのよ。澄子って言うの。間宮澄子。「ジュン」はお店で使っ

拓也

た源氏名よ。久しぶりにその名前で呼ばれたわ。

拓也

サキさんも本名は違うんでしょうか？(メモ帳を取り出す)

ジュン

違うわよ。……ねえ拓也さん。調べてどうするの？サキの事。

拓也

どうするっていうか……ただ事実が知りたくて。

ジュン

隆君は何て？

拓也

親父は「お前には何も言わない」って言って何も教えてくれません。でも、調べてる事は薄々分かってると思います。でも止めろとも言わないから、自分で分かる限り調べてみようと思って。

ジュン

そう。大したものだけわ。

拓也

え？

ジュン

気を悪くしないでね。あなたじゃなく隆君がよ。大した覚悟だと思ってね。

拓也

どういう事ですか？

ジュン

……人が昔話をする時、大概自分の都合の良いように喋るモノよ。彼はそうしなかった。どう思われても、それを受け止める覚悟があるって事ね。隆君らしいわ。

拓也

……またですか。

ジュン

何が？

拓也

どうして、皆、僕たち家族より親父の事を知ってるんでしょう。先日会った、親父の大学時代の先輩も、親父の事を良く知ってました。ダンスを見るのが好きだったとか、オレそんな事初めて知ったし。奥手だったとか、頭が良かったとか、性格や好みなんか僕なんかよりずっと詳しく……。

店員

お待たせしました。

コーヒーが来る。

ジュン

(一口飲んで) ……若かったから。

拓也

え？

ジュン

若くて幼くて…自分の気持ちに正直でいられたのよ。だから周りも理解しやすく、お互いも知り合える。性格も趣味も。だけど、あなた達は親子でしょ？

拓也

親子は理解し合えないんですか？

ジュン

そうじゃないわ。親子としての理解は違うと思うの、私達とはね。拓也さん、お爺様はご健在？

拓也

いえ、僕が幼い頃に亡くなったので、記憶はありません。

ジュン

そうだったの。隆君のお父さん…つまりあなたのお爺様と隆君は、あまり良い関係とは言えなかったわ。お爺様は学校の先生をしてらして、厳格で…隆君はそんな父親をむしろ恐れていたわ。でも、親の愛情が無かったわけじゃない。隆君が家出をした時、死に物狂いで探していたのもお爺様だった。

拓也

親父が家出？。

ジュン

…事実を知って、あなたがどうしたいのか私には分からないけど。過去は過去でしかないわよ。

拓也

親父は『「真実」なんて本当はどうでもいいんじゃないか』って言ってました。でもオレは親父にとってどんな存在だったのか知りたいんです。その手掛かりが過去にあるんなら、出来る限り調べるつもりです。遠回りね。直接言い会えない……それも「父親と息子」だからなのかも知れないわねえ……。

ジュン

ジュンが拓也のメモ帳を取り、何かを書き始める
書き終えて拓也に渡す。

拓也

小野美咲……これがサキさんの本名……。この下の住所は？
隆君とサキが住んでいたアパートよ。

ジュン

拓也

一緒に住んでいた……。

ジュン

サキは孤児（みなしご）だったの。幼い頃に両親を亡くしてね。その頃の事は詳しくは知らないけど、私が出会った頃は一人で生活してた。働いて生活費を稼いで……。普段は、質素な生活をしてたわ。余ったお金でダンスのレッスンをしてた。真面目でね。そう、隆君もサキも真面目だった。そして二人は、駆け落ちした。

拓也

親父が駆け落ち……。 (苦笑)

ジュン

何かしら？

拓也

あの親父が、そこまで……まるで想像がつかない。

ジュン

激しくない恋愛なんてある？

拓也

そうですね……。

ジュン

私が話せるのはここまでよ。後は自分で調べてちょうだい。

拓也

ありがとうございます。(そわそわしている)

ジュン

さ、もう行ったら？私はこのコーヒーをゆっくり飲んでいきたいから。

拓也

じゃあ。(お勘定を置いて) 本当にありがとうございます。(退場)

ジュンはコーヒーを飲む。

ジュン

……サキ。あの子あんなに大きくなったのね。

年老いた中島が来る。

こちらも年令には似つかわしくない若さを感じさせる。

中島

帰ったか？

ジュン

ついさっきね。あなただったら、来なくても良かったのに。

中島

だって、隆の子供だろ？

ジュン

走ってきたの？血圧上がるわよ。(自分の水を渡す)

中島

(水を飲み、来た定員に) アイスコーヒー。あれ以来、隆とは連絡取れなかったからな。

ジュン

取れなかったんじゃないよ、取らなかったのよ。

中島

ま、そうだけど。で？どこまで話したんだ？

ジュン

サキの本名と二人の住んでたアパートの住所よ。

中島

中途半端な教え方だな。教えるなら全部教えればいいじゃないか。教えないなら何も言わなければいいものを。

ジュン

だから、あなたは何時まで経っても子供なのよ。少しは頭を使いなさいな。何だいそれ。

中島

ジュン

好奇心旺盛な若者に何も教えなかったら、不満が残るだけでしょう？

中島

じゃあ、全部教えてあげればいいじゃないか。

ジュン

バカ。隆君が何も言わないのに、私が教えてどうするの。私達はね、彼の人生に関与しちゃいけないの。

中島

：・そっか。でも、大丈夫なのか？アパートの住所まで教えちゃって。

ジュン

大丈夫よ。もう取り壊されてマンションが建ってるわ。あの周りにその頃の事を知ってる人は誰もいない。

中島

そっか。結局、何も分からないんだな彼は。

ジュン

そう思うんだけど：・どうかしらね。

中島

：・拓也君、大きくなってたか？

ジュン

そりゃもう。

中島

隆も不器用だな。

ジュン

そうね。

店員がアイスコーヒーを持ってくる
店員が去ると

M7 「BGM⑥リプライズ」

中島

なあ、この曲。

ジュン

懐かしいわねえ。

中島

踊るか。

ジュン

ここで？喫茶店よ。

中島

拓也君の輝かしい未来の為に。

二人が手を取り、踊り始める。

ジュン

ねえ。

中島

何だ？

ジュン

：・何でもない。

中島

何だよ、言えよ。

ジュン

相変わらず、踊り下手ね。

中島

悪かったな。

ジュン

フフッ。

舞台次第に暗転

隆とサキのアパート。狭い感じがする安アパート。

台所は舞台奥（裏）

サキが一人ため息をつきながら雑誌を読んでいる。

そこへ、小林がやってくる。（手にはお土産）

ノック音。

サキ
はーい。

小林
ただいま。

サキ
小林さん、いらっしやい。

小林
もう、サキちゃん。そこは「おかえりなさい」って言ってくんなきや。

サキ
（笑って）もう、何言ってるんですか。

小林
いいじゃない。俺にも、新婚夫婦の気分味わわせてよ。（座りながら）ま

だ誰も来てないの？これお土産。

サキ
ありがとうございます。誰も来てないわ。小林さんが一番乗り。（お茶を

準備しながら）小林さん、新婚気分味わうんなら、私じゃない人に言って

もらって。

小林
ちえ、だってさあ隆がいなかったら、オレがここに住んでたかもしれない

じゃない？

サキ

それは無いと思えますよ。

小林

はつきり言うね。最近冷たくない？サキちゃん。店ではまんざらでもない
と思っただけだなあ。

サキ

それは：・だって、店ですから。

小林

だよねだよね。どうせオレは客ですよ。こうやって女に騙されて行くんだ
なオレは。

サキ

小林さんだってモテるでしょ？

小林

いんや。誰も分かってない。オレはモテないの。中島までジュンちゃん
いい仲なのに、俺だけ取り残された気分だよ。

サキ

そういえば、ジュンちゃんもお店辞めたって聞いたけど。

小林

うん、つい最近ね。あれ、会ってない？

サキ

なかなか予定が合わなくて。今日久しぶりに会うのよ。

小林

君達に触発されたんじゃないかな。どうやら、中島が辞めさせたらしい。

サキ

え？そうだったの？詳しい事聞いてなかったから。

小林

ジュンちゃん、ダンスは続けてるらしいけどね。今は中島が彼女の生活の

サキ

面倒を見てるみたいだよ。あの二人、結婚するんじゃないか？

サキ

まあ、素敵。でも良かったわ。ジュンさんダンス上手だったもの。続けて
欲しかったの。

小林

サキちゃんも、店は止めてもダンスは続けてるんだろ？

サキ

(頷いて) 隆君が続けてもいいって言ってくれて。

小林

あいつも、頑張ってたんだな。何てったって親の反対押し切って駆け落ちまでして出てきたんだから。男としては、好きな女に好きな事させてあげたいんだろ。良かったなサキちゃん、隆選んで正解だな。

サキ

ええ、そうね……

小林

ん？どうしたの？

サキ

小林さん、聞いて欲しい事があるんだけど、隆君には内緒で。

小林

いいよ、何？

サキ

最近、彼、私に内緒で夜は道路工事のバイトに行ってるらしいの。私が寝た後に。

小林

え？バイト？何で？区役所は？

サキ

実は、お父様が区役所によく来るらしいの。会わないようにはしてるみたいだけど。

小林

あちゃあ、この場所バレちゃった？

サキ

まだだけど。私は時間の問題だと思ってる。多分、隆君もそう思ってるんじゃないかしら。

小林

そりやそうだよな。尾行でもされたら終わりだよ。

サキ

彼、区役所辞めるつもりなんじゃないかしら……だから夜バイトをし始めたんじゃないかなって。

小林

区役所を辞めて夜のバイトに専念するってこと？

サキ

ええ。まだ、本人には聞いてないけど。

小林 そっか。

サキ お父様が私達の付き合いを反対した時も心苦しかったけど、私の為には隆君がポロポロになっていくのが、だんだん耐えられなくなってきた……。

小林 考えすぎだよ。きっと隆は、今が一番幸せだよ。辛くてもね。

サキ 辛くても？

小林 多分、人生で初めてなんじゃないかなあ。隆が自分のしたいように生きてるのがさ。だから、放っておけよ。隆から何か言ってくるまでは。

サキ でも……。

小林 そもそも、隆の親父さんが反対する理由がオレには分からないんだけどね。

サキ サキちゃんが水商売してたからってだけだろ？

サキ まあ、嫌いな人は嫌いよね。女売ってるって思われがちだし。息子が騙されてるんじゃないかって思うのも無理ないわ。

小林 だけど教育者が、人を偏見の目で見ていいのかね。オレが隆の立場だったら同じことしてるよ。話しても理解してもらえないなら、家出するね。

サキ お父様は、隆君に幸せになってもらいたいのよ。私みたいな女じゃなくてももっとちゃんとした人と結婚してもらいたいわ。

小林 「ちゃんとした人」って何だよ。気にしてんのは世間体だろ？結婚式に「花嫁はシヨードンサーで、キャバレーで働いてました」って司会者に言われたくないだけだよ、あの親父は。なんかオレまで腹立ってきた。

サキ でも、分岐らないわ。お父さんの気持ち。

小林 サキちゃんはいいい女だよ。そんな女を幸せに出来ないようだったら、男として失格だよ。少なくともサキちゃんを一人占めしたんだから、その分あいつは苦労しなきゃ、オレが許さない。

サキ (微笑して) 小林さん……。ありがとうございます。

隆が入ってくる
手には買い物袋。

隆 ただいま。小林さん、いらっしやい。(サキに) はい、これ。

サキ ありがとう、すぐ、用意するわね。(小林のお土産も持って台所に行く)
隆 (座りながら) 早かったですね。

小林 サキちゃんに、隆との事、考え直すように説得してた。

隆 人の婚約パーティーに来て、ぶち壊すつもりですか？

小林 最近観た映画にあったなあ「卒業」だっけ？花嫁かつさらうやつ。

隆 見てませんよ。嫌な映画だなあ。

小林 見てないの？結構話題になったぜ。オレはダスティン・ホフマンって言ったところかな。

隆 幸せな人ですね。(自分でお茶を注ぐ)

小林 ダスティン・ホフマンが？

隆 あなたがですよ。

小林

お前に言われたかねえよ。こいつ！（じゃれあう）

中島とジュンが入ってくる

二人

こんにちは。

ジュン

やだ、何じゃれてんの。

小林

あくあ、もっと、幸せな奴らが来た。

隆

どうも、お久しぶりです。まあ、座って下さい。

中島

はい、お土産。祝い事にはこれだろ。（シャンパンを出す）

隆

さすが、先輩。手ぶらの誰かさんとは違いますねえ。

小林

何言ってるんだ。俺だって……

隆

美咲。グラスもってこいよ。

サキ

（奥で）はーい。

ジュン

やだ「美咲」だって。呼び捨て。

中島

そっか、サキちゃん、本名は美咲だったよな。サキちゃんは何て呼んでる

んだ？

小林

さっきは「隆君」って言ってたけど。

隆

どうしても「君」がとれないんだって言ってました。

中島

お前が頼りないからじゃねえか？子供っぽいとかさ。

ジュン

いいじゃない。そのうち呼び捨てで言い合うようになるわ。いいわねえ、

何だか初々しくて。

お二人さんは？何て呼びあつてんの？

「おい」とか「ちよつと」とか。

「あんた」とか「ねえ」とか。

何だそれ？爺婆じゃないんだから。

今更「澄子」とかつて恥ずかしくてなあ。

この人「清太郎」よ。色気も何もあつたもんじゃないわ。

でも、お似合いですね。

まあな。落ち着く所に落ち着いたって感じだよな。

やだ、改めて言わないでよ。照れるじゃない。私、ちよつとサキの手伝いして来るわ。(台所へ行く)

：先輩、結婚するんですか？

ああ、そのつもりだ。あいつは将来振付師になりたいって言ってる。オレは応援するつもりだよ。

おめでとうございます。

何言ってるんだ。今日はお前達の婚約パーティーだろ？お祝いを言うのは俺らの方だ。頑張れよ。

サキちゃんを幸せにしてやれよ。

約束します。

小林

中島

ジュン

小林

中島

ジュン

隆

小林

ジュン

隆

中島

隆

中島

小林

隆

サキとジュンが食べ物等を持ってくる。

ジュン

さあ、お祝いね。音頭は誰が取る？

隆

じゃあ、今日はオレが。

中島

お、大丈夫か？

ジュン

しっかり！

隆

今日は、皆に来て頂いて本当にありがとうございます。サキの事を思えばもっと盛大にお祝いしてあげなきゃいけないでしょうけど、オレは幸せです。心から祝福してくれる皆さんに祝ってもらえるからです。結婚はもう少しお金を貯めてからと思ってますが、その時はサキの初めての家族になれるわけで：：そしたら、家族を一人でも二人でも増やしてサキを一人ぼっちにはさせません。オレは一生懸命家族を守ります。

中島

いいぞ！

ジュン

ちよつと。

隆

本日は皆さん本当にありがとうございます。皆さんの幸せも心から祈ってます。乾杯！

全員

乾杯！

楽しい雰囲気を残しつつ暗転

ブリッジM

病院の中庭

看護師が歩と話している

看護師①

：：そうお父さん、気持ちは変わらないのね。

歩 すみません。色々我儘言っちゃって。例のホスピスの件お願いできますか？

看護師①

謝らなくていいのよ。そっちの方は大丈夫。来週にでも行けるようになっておくわ。でもね、後で担当医から説明があると思うけど、正直言うとホスピスに行った所で、もう時間は無いかもしれない。

歩

そうですか。父の人生ですから、後は父に任せます。

看護師①

歩 歩ちゃん：：あのね、斎藤さんは、あなた達の事が本当は好きなんだと思うわよ。私がこんな事を言うのは変だけど、親は子供の姿を見ているだけで幸せなものよ。特に自分の最期を知ってしまったら尚更ね。そんな患者さんは大勢見てきたわ。

歩

うちの父に限って、その一般的な考えが通用するかは疑問ですけどね。

看護師①

斎藤さんねえ。何だかワザと子供に嫌われるようにしている：：そんな気がしてね。

歩

ワザと？

看護師①

歩ちゃん達がいなくなるとね、意外と優しいのよ斎藤さん。まあ憎まれ口は相変わらずなんだけど。(苦笑して) この間も「まだ死ねなくてスマン。迷惑だろうが、もう少し付き合ってくれ。」ですって。全く、なんて事言うんだろう。

看護師①

歩
いいのよ。最近何となく分かってきたわ。それが、斎藤さんなりの気の使い方なんだってね。彼は自分を過小評価しすぎなんじゃないかしら。「自分なんかの為にすまない」そう言っているように聞こえるわ。どうでしょうか。私は、まだ父が分かりません。

看護師①

歩
目に見えてる事だけが真実とは限らないわ。親子だからこそ見えない事だつてある。私から見れば、あなた達に迷惑をかけないようにしている斎藤さんは、とつてもあなた達を愛してると思うわよ。

違う看護師が隆の車椅子を押してくる

看護師②

歩
お父様にお客様がいらしててね。そうですか。

隆

歩
旧友だ。大事な話があるから、お前は席を外してくれ。分かった。あの、お父さん。

歩

歩
ん？
：・無理しないで。

歩

隆

ああ。

看護師①微笑して歩と退場
中島が入ってくる

中島

隆。

隆

先輩。よくここが分かりましたね。

中島

まあ、調べるのは大変な事じゃない。お前の家の近くの病院を探したら、すぐここだって分かったよ。この医者にオレの知り合いもいるしな。

隆

そうでしたか。

中島

久しぶりだな。

隆

もう、四十年近くになりますね。ご無沙汰してすみません。

中島

あれ以来だな。：・お互いに、年もとった。

隆

そうですね。

中島

(看護師に)後は、私がやるから。

看護師②

でも：・。

中島

私は医者だ。何かあれば対処する。

隆

大丈夫だよ。

看護師②

分かりました。

看護士退場

中島

うちのやつと拓也君が会ったそうだよ。

隆

ジュンさんと……。そうでしたか。じゃあ、拓也は全てを知ったんですね。

中島

お前も分かってないな、そんなわけないだろ。

隆

え？どういう事ですか？

中島

あいつが全部を教えるような女か？意地が悪いからな。教えたのはサキの本名とお前達が住んでたアパート住所だけだったよ。

隆

でも、あの辺はもう……。

中島

ああ、すっかり変わっちゃまって、手掛かりなんぞ残ってないらしいがな。全てを言ってくれても良かったのに……。しかし、ジュンさんらしい。

隆

オレもそう思う。……。なあ、隆。なぜ拓也君に何も言わないんだ？

隆

……。

中島

オレには分からん。面と向かって言えばいいじゃないか。拓也君も、もういい大人だ。それなりに受け止めるよ。

隆

そうかも知れません。

中島

まあ、子供のいないオレがどうこう言えるもんじゃないけどな。

隆

先輩は、子供がいなくて寂しいか思った事はありませんか？

中島

ない、と言えば嘘になるかな。でも仕方がない事だ。あいつに子供が出来なかったのは、誰のせいでもない。神様が決める事だ。

隆

もし、神様が決める事ならば、私は神様を恨みます。

中島

おいおい、お前には、子供達がいるじゃないか、何を恨む事があるんだ？

隆

先輩に子供がいない事。私に子供がいる事。それが神の決めた事なら私は

中島

神様を恨みます。先輩にこそ子供を与えるべきだった。私なんかじゃなく。

隆

：・隆。

中島

あなた達は完璧だ。二人の仲は今でも完璧だろうと想像がつく。そうでしょう？

隆

光栄だね。しかし、否定はしないよ。あいつは私の全てだ。

中島

全てですか：・。そんな言葉を素直に言ってみたい。きつと、先輩には分

中島

からない。素直に愛していると云える事がどんなに尊いか：・。

隆

：・隆。

溶暗

拓也が通りかかる人に尋ねている。(前芝居。後ろ徐々に
転換。過去のアパートへ)

拓也

あの、お聞きしたい事が……。そうですか、すみません。あの、ちょっといいですか……。

暫く尋ね回るが、誰も答えてはくれない。

諦めかけると、弘美が現れる。

弘美

拓也。

拓也

ああ、よくここが分かったな。いつ来たんだ？

弘美

さっきよ。歩ちゃんに聞いて。何か分かった？

拓也

ダメだ。この辺にサキさん達が住んでたアパートがあったらしいけど、取り壊されてて。不動産屋にも聞いてみたけど、土地の所有者も変わってるみたいだから、分からないって。ましてやその頃住んでた人の事なんて、まるで見当もつかないよ。

弘美

手掛かりなしってわけね。聞き込みしてたの？

拓也

そうなんだけど、この辺土地開発があったみたいでさ。町自体が新しいん

弘美
拓也

私、この人知ってる。
何だって？

アパートのシーンへ移行（過去）
ある日のジュンとサキの会話
前舞台溶暗

ジュン

もう、三ヶ月経つのね、二人が暮らし始めて。どう？上手くいってる？
君は優しい？

サキ

ええ、とつても。ジュンさんの方はどうなの？

ジュン

上手くいってるわ。実はサキに話しておかきやいけない事があって…私
達、結婚するんだけどさ。

サキ

そうみたいね、おめでどう。

ジュン

ありがどう。まあ、それは分かったと思うけど。実はね、結婚したら引
っ越すの。

サキ

まあ、そうなの？どこへ？

ジュン

アメリカ。

サキ

アメリカ？

ジュン

でもね、ずつとじゃなくて多分三年位。清ちゃんの仕事の都合で。海外出
張ってやつ。

サキ

清ちゃん？ああ、中島さんね。でも凄いやないアメリカだなんて。勿論
ついて行くんでしょ？あ、でもダンスは？

ジュン

折角だから、本場のダンスをこの際学んでこようと思つて。

サキ

素敵！最高ね。

ジュン

でしょう？私、もつともつと勉強して世界的な振付師になるわ。

サキ

ジュンさんなら出来るわ。応援してる。

ジュン

ありがとう。

後ろ舞台溶暗

拓也

それじゃあ、弘美がいた施設に働いてたのが、美咲さん？

弘美

間違いないと思うわ。とつても似てるし、よくよく思い出してみると、ス
タイトルも良くて、元ダンサーだったって言われれば、そんな感じもする。

拓也

でも、その頃はもう踊ってなかったって事だよな。

弘美

そうね。そんな話聞いた事も無かったし。

拓也

他に何か思い出す事はないか？

弘美

そうね。個人的な話はしなかったから。でも優しい人だったわ。私、美咲
さん大好きだったから。落ち込んだ時なんかは、黙ってそばにいてくれて。

拓也

私の話をずっと聞いてくれて。とつても暖かい人。

拓也

今でも、その、元気なのかな？美咲さん。

弘美

さあ、どうかしら。最近は、施設とは年賀状のやり取りしかしてないから。ちよっと待って連絡してみるわ。(携帯をとる)

前舞台溶暗

ジュン

で？サキの話って何なの？

サキ

：ジュンさん、実は私、ダンスを辞めるかもしれません。

ジュン

え？何で？隆君が反対してるの？そんなわけないわよね。

サキ

ええ、そうじゃないんです。ちよっと事情があって：。

ジュン

何？

サキ

まだ、ハッキリとはしてないんですけど。多分というか、間違いないとい

うか：。

ジュン

もう、じれったいわねえ。何なのよ。

サキ

来ないんです。

ジュン

何が？

サキ

：あれが。

ジュン

「あれ」？それじゃあ何だか分かんないわよ。何よ「あれ」って。

サキ

だから：。「あれ」です。

ジュン

だから：え？：。「あれ」って：。「あれ」？月一の「あれ」？

サキ

はい。

ジュン

お医者さんには行ったの？

サキ

明日行ってこようかと。でも検査薬では間違いないみたいで。

ジュン

サキ！やだうそ！本当！

サキ

はい、赤ちゃんが出来ました。

ジュン

やったあ！（ハイタッチをしようとする）

サキ

え？何？

ジュン

ハイタッチよ。アメリカ流！ほら。

ハイタッチをする二人

ジュン

おめでどう！

サキ

ありがとうございます。

後ろ、ひとしきり喜んだ所でジュンは退場（後ろ舞台溶

暗）

弘美

（携帯を切って）繋がらないわ。どっちみち行った方が速いわね。詳しい

事聞きたいでしょ？

拓也

…そうだな。一緒に来てくれるか？

弘美

…ちよっと怖くなった？拓也。

拓也

：・親父は、何も言わなかった。言いたくないのか、言えないのか：・。事実を知れば知るほど、親父の知らなかった一面が見えてくる。始めはそれが楽しかった。でもだんだん、知らない方がいいんじゃないか？って事も見えてきて：・。

弘美

お父さんが何で言わなかったのか：・。

拓也

ジュンさんが言ってた。親父には、他人にどう思われても、それを受け止める覚悟があるって。だから、自分からは喋らないんだってね。

弘美

だとしたら、決めるのは拓也ね。どうする？ここまでにしておく？

拓也

：・色々調べてみて、親父に対する考え方は変わったよ。親父は無感情の人間なんかじゃない。それどころか、愛情深くて思い切りもあって、駆け落ちなんて信じられない事までやってのける。それが分かっただけでも、俺には大収穫だ。でも：・。

弘美

でも？

前舞台溶暗

SE「電話の音」

サキ

もしもし。斎藤です。

別空間に隆の父（治）が電話をしている

治 もしもし、サキさんかね。隆の父だが。

サキ お父さん！あの……。どうして……。

治 その場所はかなり前に分かっていった。この電話番号もね。でも、どうしたものか、決めかねて連絡せずにいたのだよ。

サキ あの、お父さん。……私達真剣に付き合っています。確かに私が至らない点は沢山あると思うし、ご不満な所もあるかと思いますが……。

治 私はねサキさん。隆を、水商売の女と一緒にさせる為に育ててきたわけじゃない。それに、あなたにお父さんと呼ばれるのも不愉快だ。

サキ ……すみません。

治 一ヶ月もすれば、飽きて戻ってくるかと思っていたが、相当隆の奴はのぼせ上がっているようだな。大した女だよ。

サキ ……私は、隆君に強制した覚えはありません。

治 開き直るのかね。（ため息をついて）まあいい、その通りなんだろう。今の隆に何を言っても無駄な事ぐらい、私だって分かる。しかし、今日はサキさん、あなたと話そうと思って電話をしたんだ。

サキ 私と？

治 サキさんは、このままでいいのかね？

サキ どういう意味ですか？

治 隆を愛しているのだろうか？

サキ はい、心から。

治 だったら、自分の幸せだけでなく、当然隆の幸せも考えていると思うが、違うかね？

サキ 勿論です。隆君が幸せでなければ、私も幸せにはなれません。
なるほど。では聞くが、今の隆は幸せかね？

サキ そう思います。

治 自信家だな。確かに好きな女と一緒に暮らす。そのこと自体は幸せなのか
もしれん。しかし隆は区役所を止めようとしている。そうじゃないのか？
それは：：ここの場所を突き止められないようにする為で：：。

サキ そうやって私から逃げる度に、隆は職を変えなきゃならんのか。それが果
たして隆の幸せか？

サキ でも、隆君は：：。

治 隆は、文句も言わずに働くだろう。好きな女の為にね。だからこうやって
あなたに話しているんだ。それにサキさん、あなたは考え違いをしている。
え、考え違い？

治 隆が道路工事のバイトをしているのは、私のせいばかりではない。単純に
給料がいいからだ。あなたを養う為、割のいい仕事をしているのだよ。

サキ そんな：：。

治 もともと、肉体労働なんて向いていない隆が、夜の道路工事という仕事を、

サキ
治

これから先もこなせるとは思えない。体を壊してボロボロになるのがオチだ。大学を出て、将来何の不安もない公務員という職業に就かせたのは、私が教育者だからというわけではない。それが隆にとって一番良い道だと考えたからだ。私は厳しいと言われるが、私だって親だ。親は子を想うものだよ。サキさん、あなたは隆の事を何処まで考えているかね？

私は……。

今、答えを出さなくてもいい。良く考えてみてくれ。話はそれだけだ。

後ろ空間溶暗

弘美
拓也

拓也、全てを知りたいんでしょ？

親父が知って欲しかった事が、サキさんとの恋愛だけなら、オレはこの先を知っても意味が無いのかもしれない。それに、新たな事実を知ること、また親父を軽蔑してしまうかもしれない。……でも、元々の目的は、オレが親父にとってどんな存在だったのかを知る事。やっぱりそれがオレにとって必要なんだ。

弘美
拓也

言ってる事の意味は分かるつもりよ。……行きましよう。
行こう。

拓也と弘美退場

アパートのシーンへ（夜）

隆とサキが寝ている。

しばらくすると、隆が起きだしてバイトに行く用意をしている。

隆は風邪をひいてる様子。咳こんでいる。（セリフ途中も咳きこんでいる）

サキが起きる。

サキ

隆、今日もバイトに行くの？

隆

ああ。美咲は寝てな。夜更かしは、おなかの子供にさわるよ。

サキ

でも、風邪引いてるんじゃないの？熱は？（測ろうとする）

隆

（制して）ダメだよ近づいちゃ。移るだろ。

サキ

そんなに無理しなくても。

隆

話し合っただろ？区役所はいずれ辞めなきゃいけないって。親父にここが

バレたら、俺達終わりなんだから。

でも……。

隆

それに、子供が産まれたら何かと物入りだし、金はあるもんじゃない

いしな。オレは、生まれてきた子供が不自由なく育って欲しいんだ。オレみたいに親の決められた道を行くんじゃなくて、伸び伸びと。だから、オレは親父みたいにガミガミ言わないって決めてる。何でもやらせてあげた

サキ
隆
サキ
隆

いんだ。(激しくせき込む)
でも、今日くらいは……。

うるさい！寝てろ！

隆……。

……ごめん。なるべく早く帰るから。(退場)

サキ、暫くして意を決したように、手帳に閉まってあつたメモ紙を取り出す。

M 9 「BGM⑧」

電話の前に立ち、震えているサキ。

サキ

……ごめんなさい。ごめんなさい、隆。

電話をかけるサキ。

サキ

夜中に失礼します。斎藤さんのお宅でしょうか？私、小野美咲と申します。……はい。隆さんを……隆さんを……お返しします。

音楽大きくなり
暗転

#8 「養護施設」(現在)

養護施設。孤児院。

保育所のような感じ

奥に机が置いてあり、老紳士が座っている。(小林)
拓也達が入ってくる。

弘美 失礼します。お久しぶりです、院長先生。

小林 弘美ちゃん、電話をもらった時はビックリしたよ。大きくなったね。

弘美 ご無沙汰してて、すみません。早速なんですけど……

小林 まあまあ、そう焦らずに、お茶でも飲んで。遠い所、ご苦労様だったね。

今、ちょうど子供達は学校に行ってるね。小さい子もないから、私が留守番してるんだ。どうぞ座って。

拓也 すみません。

小林 君が拓也君だね。そうか……

拓也 あの、何か？

小林 いや、その、弘美ちゃんもいい人に巡り合ったんだなって思ってるね。

弘美 やだ、先生。褒めすぎ。

小林 お世辞じゃないさ。それに……拓也君も大きくなった。

拓也 え？

弘美
小林
拓也
弘美
小林
拓也
小林
拓也
弘美
小林
拓也
弘美
小林
拓也

どういふ事ですか？先生は拓也を知ってるんですか？

(頷いて) 少し前に、ジュンちゃんから電話をもらってね。彼女は古い友人なんだよ。お父さんの事も聞いている。本当に残念だ。

：：そうですか、ジュンさんが。

もし、ここへ来るような事があつたらよろしく頼むと言われたよ。全く、無責任なのは変わらないな。

先生。昔、拓也のお父さんに何があつたんですか？

：：拓也君、ある程度予想はついてるんじゃないか？自分自身の事。

：：ええ、まあ。

それで？

オレの母親は、サキさん：：つまりオレは、美咲さんの子供なんじゃないかって。

拓也：：。

拓也君。：：その通りだよ。

先生。

施設の過去のシーンが入る

(上手・下手でエリア分け)

子供を背負っているサキがいる。(掃除をしている)

そこへ、隆と智子(隆の妻)がやってくる。

隆は周囲を見渡して、いまだサキだという事に気づかない。

智子

すみません。ここは「森の宮養護施設」ですか？お電話した斎藤と言いますけど。

サキ

はい、お待ちしておりました。すみませんね、今院長が不在でして、私が代りにここを……。 (隆に気付く)

隆

！（サキに気付く）

智子

あの、この職員の方ですか？

サキ

：・あ：・はい。院長は他の施設に出向いてまして、現在私がここの運営を任されています。

智子

そうなんですか。実は、男の子を引き取りたいなあって思ってるんですけど。

サキ

：・お子さんがいらっしやらないんですか？

智子

え？ええ。実は私達、子供が出来にくいみたいなんです。私の方に問題があつて。

隆

智子。

智子

隠してもしょうがないわ。本当の事だもの。それで、夫婦で話し合つて、養子をとろうつて決めてここに来たんですけどね。子供達はどこですか？

サキ

今は、外で遊んでいます。もしよろしければ、ご覧になって下さい。

智子

隆

智子

ああ、そうでしたの。あなた、行きましようか。
いや、その。：もう少しこの方に、詳しい話をお聞きしたいから。
そう？分かったわ。じゃあ私は、ちよつと見てきますね。では失礼します。
(退場)

現代に移行

小林

偶然だったんだ。まさに奇跡的な再会だった。サキちゃんは君のお父さんの将来を心配して、自分から身を引いてこの孤児院に身を寄せた。君はここで生まれたんだよ。まさか、再会するとは思ってもいなかっただろうね、二人とも。

弘美
小林

でも、拓也には歩ちゃんがいるじゃない。妹さんもじゃあ、孤児だったの？
いや、妹さんは実の子供だ。奥さんは確率は低かったけど妊娠は可能だったんだ。

弘美

じゃあ、拓也と歩ちゃんは腹違いの兄弟って事ですか？

小林

そうなるね。今考えると、まるで、君と隆を再開させるために、神様がいたずらをしたみたいに見える。

弘美

ちよつと待って：「隆」って先生は拓也のお父さんを知ってるんですか？

小林

(頭をかく)：まあね。彼も昔の友人だよ。

拓也

あなたは親父を知っていた：。その当時からここで院長をなされてたん

ですか？

小林

ああ、そうだよ。

拓也

つまり、美咲さんを匿っていたんですね。父に内緒で。

小林

そう。サキちゃんに口止めされてね、隆には何も言っていなかったんだ。だけど、隆がここに来たちようどその時、僕は幾つかある他の施設にかかりきりでね。短い期間だったが、その時は実質サキちゃんが、この施設を運営していたんだ。

弘美

たまたまその時に……。

小林

(頷いて) またどうして、そのタイミングだったんだか……。僕がいたら事態も変わっていたかもしれない。残酷だな。人生は、本当に不思議で残酷だよ。

過去に移行

隆

何故……どうして？一年以上も。

サキ

私は、あなたに相応しくはないわ。

隆

全てを捨てたのに……。美咲の為なら全てを捨てたのに。あれから、オレがどんなに君を探したか……。

サキ

私の為にあなたに苦勞をして欲しくなかった。でももう、終わった事よ。私は新たな人生を歩んでる。あなたもでしょ？

隆 …見合い結婚だね。親の勧めだよ。

サキ いい人そうじゃない。

隆 確かにいい人だ。でも…。

サキ これが一番良かったのよ。それぞれの人生を大切にしなきゃ。

隆 もしかして…その子、なのか？オレ達の子供…。

サキ いいえ、違うわ。あの子は流産したの。この子は施設の子供。

隆 そんな、まさか…。

サキ いいえ、本当よ。あの子は流れてしまったの。申し訳ないけど。

現代へ移行

弘美 何でそんな嘘を？

小林 隆に、負い目を感じて欲しくは無かったんだろうな。子供の事で、自分に未練を残して欲しくはなかったんだと思う。

隆 でも、親父は気づいてたんじゃ？

小林 僕もそう思うよ。サキちゃんの背中にいた君が、自分の子供だってね。そりゃ分かるだろう、親子なんだから。

弘美 サキさんは、お父さんの為に、むりやり嘘をついたのね。

小林 (頷いて) でも、その嘘が更にサキちゃんを苦しめる事になったんだ。

過去へ移行

智子が戻ってくる

智子

大きなお子さんが、多いんですね。養護施設でもっと幼い子ばかりだと思ってみました。

サキ

はい。昔は小さい子が多かったみたいですが、最近は大虐待を受けている子供達の受け入れ先にもなってますから。大きい子が多くなってきました。

サキ

そうなの、可哀想に。……ところで、その赤ちゃんも孤児なんですか？

智子

男の子？

サキ

はい、男の子です。

智子

抱かせてもらってもいいかしら？

サキ

え、ええ。どうぞ。

智子

(赤ちゃんを抱いて) 小さいわ。いくつなのかしら？

サキ

……四ヶ月です。

智子

この子は、捨て子だったの？

サキ

ええ、まあ。

智子

見て、あなた。かわいいわ、この子。

隆

そうだな。本当に……かわいい男の子だ。

サキ

「拓也」って言います。

隆 拓也……

智子 こんにちは、拓也君。拓也君は私を気に入ってくれるかしら？

隆 智子？

智子 ねえ、どう？この子だったら私達の希望にピッタリじゃない。

隆 しかし、そう簡単に決めるもんじゃないだろ。

智子 私は決めたわ。この子にする。(サキに) ねえ、あなたはと思う？

サキ ……私、ですか？まずは、お二人で話し合って頂いて……

智子 それはそうだけど、あなたの意見を聞きたいの。私達じゃ、この子の親に

サキ はなれないかしら？

隆 智子、無茶言うもんじゃないよ。別に、今聞かなくてもいいだろ？

サキ なれると思います。拓也の……拓也君の親に、きつとなれると思います。

現代に移行

※過去のシーンは以後ないので隆たちは退場

弘美 本心だったのかしら？

小林 本心だったと思うよ。僕がその場にいたら、そんな事はさせなかった……

すまん、これは言い訳だな。でも、誤解しないで欲しい。サキちゃんは、決して君を手放したくて言ったわけじゃない。君の事を一番に考えた結果だ。

拓也

それは、分かる気がします。親父の事を想って姿を消した事なんかを考えてみても、決して無責任な人じゃない。ただ、人の事を考えすぎだとは思うけど。

小林

私もそう思うよ。(ため息をついて)彼女は、自分の幸せを考えなさすぎる。本当に……。

弘美

それで、結局拓也はお父さん達にもらわれていったのね。美咲さん、辛かったでしょうね。

小林

そうだろうね。

拓也

その後、親父はここへは来なかつたんですか？

小林

サキちゃんもそれを心配していたが、結局隆は来なかつたよ。彼ももう、無茶が出来なかつたんだと思う。誰も幸せにはなれないしね。

拓也

幸せになれない？

小林

隆も、サキちゃんを追ったところで、逃げてしまうのは分かっていただろうし、君を置いてまた駆け落ちするわけにもいかないだろう。彼だってそこまで無責任ではないよ。

弘美

お父さんは、美咲さんの気持ちを理解したのね。

小林

隆も辛かつただろう。愛する人に嫌われたわけじゃなく、愛するがゆえに去って行かれたんだから……。

弘美

そうね。……それで先生。美咲さんは？まだここにいらっしやるの？

小林

それが(頭をかく)……去年亡くなったんだ。

弘美 え？うそ？私知らなかったわ。連絡してくれれば良かったのに。
小林 すまない。突然だったものでね。申し訳ない。
拓也 ・・・そうですか。もう、これ以上は調べようがありませんね。弘美、帰ろ
う。

弘美 え？ちよつと、もういいの？

拓也 院長先生、ありがとうございます。

小林 いや、役にたてたかな？

拓也 はい、とっても。・・・（帰ろうとして）先生、親父には、美咲さんが亡く
なった事、伝えた方がいいですか？

小林 ・・・彼女の為にそうしてくれ。

拓也 分かりました。・・・美咲さんが、天国では幸せになれるよう祈っています。
失礼します。

二人、退場。

暫くして

小林 ・・・賢い奴だ。バレてるな。

年老いた美咲が現れる。

サキ そうみたいね。

小林 さすが、サキちゃんの息子だ。母親が死んだなんて言っても信じてもらえないよな。そんな都合の良い嘘。まあ、僕の態度で見抜いたんだろうけどね。(頭をかく)

サキ 私が思っていた以上に成長していたわ。

小林 本当に、もう会わなくていいのかい？

サキ これからの彼の人生に、私は必要ないわ。それに……

小林 これからは自分の人生を考えるべきだ。そうだろ？

サキ それでも、親ですからね。拓也の幸せを祈っているわ。

小林 (ため息をついて) まだ、自分の幸せを掴まないのかい？目の前にあるのに。

サキ 小林さん……

小林 拓也君も、君の幸せを望んでいるよ。だから、君が死んだ事にしておいた方が、新たな人生を歩めると思ったんだろう。もう、自分の幸せに後ろめたさを感じなくてもいいんじゃないか？僕も老い先短いよ。待つのに限界がある。

サキ (少し笑って) こんなおばあちゃんでもいいの？

小林 前から言ってるだろ？サキちゃんはいいい女だよ。やっど、一人占め出来る。

サキ 小林 サキ

(サキを抱く) 美咲。
幸せになれるかしら？
それが出来なかったら、男として失格だ。
ありがとう。

暗転
転換

舞台素舞台。

拓也が隆の車椅子を押して出てくる。

中庭にいるような感じ

隆 いい天気だな。

拓也 そうだな。桜がきれいだ。

隆 見納めだな。

間

車椅子を止める

隆 それで？

拓也 ……オレは孤児だったんだな。施設の人が教えてくれた。

隆 ……そうか。そこまで調べたか。

拓也 それから、オレを可愛がってくれた美咲さんっていう人、亡くなったみたいだ。あまり詳しい話は聞けなかったよ。

隆 ……亡くなったのか。

拓也 幸せそうに亡くなったって。

隆

そうか。彼女結婚はしていたのか？

拓也

……ああ、してたよ。

隆

それは良かった。

拓也

親父、世話になったんだろ？その、美咲さんて人に。

隆

色んな事を学んだよ。

拓也

……大切な人だったんだな。

隆

そう、とても大切な人だった。……なあ、拓也。顔が見えん。こっちに来い。

隆、拓也を自分の前にしゃがませる。

隆

私を軽蔑していたか？

拓也

ああ、してた。

隆

平凡な男だと思っていたか？

拓也

思ってたよ。

隆

無感情で冷たい男だと感じていたか？

拓也

ああ、親父は冷たい男だ。

隆

その通りだ。

拓也

あんたは、誰も幸せに出来ない。

隆

ああ、そうだ。

拓也

好きな女一人守れない。

隆

未熟者だな。

拓也

その女の大切なものを奪っても平然としてる。

隆

臆病者だ。

拓也

母さんにまで嘘をついて。

隆

そうだ。

拓也

嘘だらけの人生で

隆

そうだ。・・・そうだ。

拓也

息子を愛せない。

隆

それは違う。

拓也

違う！（立つ）

隆

・・・違う。

M 1 1 「B G M ⑩」

隆

：愛した者が去っていくのが耐えられなかったんだ。また去って行ってしまいうで。

拓也

：バカだな。

隆

でも、そんな事は無理だ。長い時間の中で、愛情が薄れるなんて事はない。そんな事はな、無理なんだよ。

拓也

隆

拓也

隆

拓也

隆

理解出来たのに……親父がどんな過ちを犯しても、どんな人生を送っていても、オレは親父を理解できたのに。オレを見てくれさえすれば。怖かった。背中を向かれるくらいだったら、始めから見なければいいと思っていた。愛さなければいいと。

……親父。

……拓也……死にたくねえなあ。お前を失いたくない。

親父……。大丈夫だ。そばにいるよ。大丈夫だ。

拓也あ……。(拓也を抱く)

暗転

SE 「結婚式の鐘の音」

前芝居で中島とジユン
反対側に小林とサキがいる。

ジユン
ねえ、清ちゃん。彼、弘美さんを幸せに出来るかしら？
中島
どうかな？人生何があるか分からないからな。

小林
隆も喜んでるな。天国で見てるかな？
サキ
きつと、そうね。弘美さんには幸せになってもらいたいわ。
小林
やっぱり、若い頃の自分と重ねて見てるな。
サキ
いいえ。今の私のように、幸せになって欲しいだけよ。

ジユン
今でも悔やむ事があるわ。あの時私達が日本に残ってたなら、サキ達を助けてあげられたんじゃないかって。

中島
だけでもし、助けてあげられたとしたら、今の小林達の幸せはないかもしれないぜ。

ジユン
そうね。結局何が幸せかなんて、後になってみないと分からないのかもしれない。

れないわ。

小林

人生に「もし」なんてあり得ない。何が正しくて何が間違ってるのかすらも分からないんだからな。

サキ

ただ一つ言えるのは、人は死ぬまで幸せを探してるって事。

ジュン

これからも、私達は彼の人生の脇役だけ……。

中島

彼を見守り続ける観客でもあるわけだ。

サキ

そして、新たな物語が生まれるのね。

四人の姿が消える。

舞台中央奥にウェディング姿の弘美とタキシード姿の拓也が立っている。

拓也・弘美

わたしたちは夫婦として、順境においても逆境においても、病気のときも、健康のときも、生涯たがいな愛と忠実を尽くすことを、誓います。

M12 「結婚行進曲」

二人が歩を進めて行く中暗転

幕